二〇一二年一〇月二七日

長々と白き築地や十三夜　うつぎ
雲幾重潜り中天後の月　菜々
括られしまま秋草の靡きをり　とろうち
秋晴の日だまりに混む鳩雀　あさこ
カメラ族ＳＬを待つ苅田かな　よし女
水底に日の斑ゆらめく秋の川　さつき
おそろひの杖もて散歩秋うらら　あさこ
朴落葉お面にかぶり子ら遊ぶ　さつき
秋寂ぶや手漕ぎの舟の艪のリズム　よし子

二〇一二年一〇月二六日

田じまいの煙を抜けて一両車　さつき
身に沁むや病室に吊る千羽鶴　三刀
クレーンのまっすぐ伸ぶいわし雲　よし子
待合の問はず語りや秋の人　よし女
線香の灰の山なす遍路寺　ぽんこ
末枯るる豪族どもの墓どころ　宏虎
十三夜煙吐かざる煙突に　有香
触れもして匂ふハーブや園さやか　はく子
白壁を忍者のぼりす蔦紅葉　百合

二〇一二年一〇月二五日

美味かりし縦走弁当秋高し　はく子
川風に吹き嬲られて霧のぼる　せいじ
境内の黙に蓑虫孤独なり　とろうち
満ち足りし余生の秋を惜しみけり　宏虎
秋惜しめとぞＳＬの遠汽笛　よし女
秋惜しむ園のハーブの百の香に　菜々
曳航の巨船ゆっくり沖さやか　よし子
光秀の城址やここだ木の実落つ　雅流

二〇一二年一〇月二四日

秋晴れて潮目きらめく茅渟の海　菜々
大壷に菊溢れしむ大師堂　英子
コスモスの丘へと風の通ひくる　百合
天高く紙ふぶき舞ひ進水す　よし子
耕運機高鳴る谷戸は霧の海　うつぎ
柏手に応と散りたる一葉かな　なつき
飽食の芋虫休むこと知らず　とろうち
ゴンドラに展けて秋の海眩し　はく子
爽やかに盤木高鳴り進水す　わかば
フレームにハーブの足湯はにぎはへり　満天
洗濯機渦に浮ききし零余子かな　よし女

二〇一二年一〇月二三日

孫誕生祝ふ赤飯今年米　こすもす
直売の小屋に垣なす秋の人　ひかり

二〇一二年一〇月二二日

所在無く丘のコスモス風を待つ　ひかり
ペットボトル浮きつ沈みつ秋の川　治男
命綱して高枝の松手入れ　よし女
暮れなずむ山の奥より鹿の笛　よし子
菓子盆に心づくしの柿紅葉　うつぎ
裸電球揺れ深秋の仁王門　よし女
枯れ蟷螂といへども太き腹もてる　三刀

二〇一二年一〇月二一日

北の宿椀に溢るる芋煮かな　ともえ
赤煉瓦塀に同化す蔦紅葉　さつき
氏神へ通ふこの道野菊咲く　うつぎ
斑鳩の九輪の空を鳥渡る　ひかり
日を孕み風を孕みて芒原　とろうち